

台湾文化の発源地・大稻埕を訪ねる その2

片倉 佳史

台湾の首位都市として君臨する台北市。今回は萬華と並ぶ台北の旧市街とされる大稻埕（だいとうてい）地区を紹介してみよう。下町情緒漂うこの一帯には台湾の伝統文化と誇りが刻まれている。個性豊かな街角の光景と現在の姿を探ってみたい。

独自の発展を遂げていた大稻埕

前回は迪化街をはじめとする大稻埕地区の歴史スポットを取り上げたが、今回も引き続き、この地域を紹介してみたい。

大稻埕は台北市の西部に位置し、淡水河に面している。古くは水運で繁栄し、河港都市の様相を呈していたが、栄華は長く続かず、上流に位置する萬華と同様、土砂の堆積によって港湾機能が低下し、衰退を強いられた。

日本統治時代が始まった1895（明治28）年頃、この地域は最盛期にさしかかっていた。清国統治時代末期、すでに台北盆地の居住者のうち、半数は大稻埕に住んでおり、萬華を上回っていたという。1899（明治32）年に編纂された台湾総督府の統計では、この頃の大稻埕には3万1533名が住んでいた。これは台南に次ぐ多さであり、その繁栄ぶりがうかがい知れる。

また、終戦まで、「内地人」を名乗った日本本土



永楽市場の建物は新しくなっているが、今も台湾最大の布地市場として機能している。



永楽市場の南側には味自慢の食堂や屋台が並んでいる。散策途中に味わいたいところ。



迪化街は日本統治時代、永楽町通りと呼ばれていた。

郷土意識の強い住民たち

この地域の繁栄を支えていた製茶業については前回も触れているが、この地で焙煎され、製茶された烏龍茶と包種茶は世界で好評を博し、高い評価を得ていた。外国企業は通商の拠点をここに構えたため、保険会社も大稻埕に成立した。また、各国の領事館も設けられた。このように、外国との接点も多かったため、同じ台北盆地でも、保守的な萬華の住民とは性格を異とし、進取の気性に富んでいたと言われる。

興味深いのは、日本統治時代、このエリアには大型の公共建築、公共施設といったものがあまり設けられなかったことである。もちろん、領台当初はその繁栄ぶりを受けて税関や銀行、郵便局、警察といったものが大稻埕に置かれたが、早い段階で、総督府は「内地人街」として旧台北城内の整備を最優先し、西門町を埋め立て工事の上、後発の内地人居住区として建設した。

大稻埕は萬華とともに、本島人街として、開発は後回しにされていた感が否めない。それが最も明確に見られるのは道路幅で、前回紹介した貴徳街（かつての港町通り）、また迪化街（同永楽町通り）などは車の行き違いすらできない。洪水が頻発していた関係で、護岸工事は早期に始められた



大稻埕エリアの道路は一部を除くと、どこも狭い。貴徳街（かつての港町通り）の様子。



霞海城隍廟。縁結びの神様とされる月下老人の人气が高く、日本のガイドブックなどでも紹介される。



日本統治時代の永楽市場の様子。『日本地理風俗大系』より複写。

が、全体としては官庁建築などが非常に少ないエリアだった。

しかし、そのために、それまで本島人自身の手で培われた台湾独自の文化が手つかずの状態で保たれることとなる。当然ながら、人々の意識も高く、大稻埕の住民は今も昔も愛郷心が強いと言われる。1920年代に起こる台湾人による自治請願運動はいずれも大稻埕で生まれていることも、こういったものと無縁ではないだろう。

台湾自治の胎動が大稻埕で発生したことを考えれば、この地域を散策する際、ややくすんだ家並みも異なった表情を見せてくれるに違いない。

迪化街に見る大稻埕の建築

前は触れることができなかったが、ここで、

迪化街に見られる商店建築について、簡単に述べておきたい。

迪化街で見られる商店建築はいずれも個性を感じさせるもので、散策の楽しみを与えてくれる。これらの多くは華南地方で生まれたものとされ、台湾や華僑進出が盛んだった東南アジア方面でよく見られた。いわゆる「長屋」のようなもので、店舗と倉庫、そして住居を兼ねたものとなっている。道路に面した玄関の間口は通常の家屋と変わらないが、奥行きがあり、屋内に入ると家屋が延々と続いている。中庭を擁しているところも多い。

建物は2階建てか3階建てが標準となっている。屋内は店舗スペースの奥に神棚が置かれていることが多く、奥は倉庫や作業場がある。そして、2階は住居スペースとなっていた。

正面には複数の建物が共同でアーケードを設け、これを「亭仔脚」と呼んだ。これは迪化街界隈のみならず、台湾各地で見られる。風雨と暑さをしのげるため、日本統治時代には造営時に亭仔脚を設けることが義務化されていた。現在も、迪化街には亭仔脚が残り、各商店の販売スペースになっている。

迪化街で見られる家屋を分類すると、大きく4つに分けることができる。

まず最も古いものは華南地方に見られる伝統的な建築様式で、大稲埕の黎明期、台湾へ渡ってきた福建移民によってもたらされた。日干し煉瓦を用い、そこに瓦屋根を載せたという簡素なもの、窓や門扉は木製であることが多い。これは古いだけでなく、自然災害にも弱いと、多くは残っていない。現在、1851年に建てられた「林五湖故居」が茶館「臻味茶苑」の運営で見学可能な空間となっている（迪化街1段156号）。毎月第二・第四土曜には家屋部分まで参観できる。

次にバロック風の装飾を施した商館建築が挙げられる。立体的な彫刻を施したものを正面上部に掲げており、壁面には赤煉瓦が南国の日差しに映

えて美しい。これは19世紀後半に豪商が競って設けたと言われ、現在もいくつかを見ることができる。

また、こういった商館建築と同時期には洋館建築も流行している。これは1900年代初頭までに見られたもので、アーチ型の窓が整然と並び、欄干など、細部に装飾が施されている。ここも赤煉瓦建築に分類される。

最後に、モダニズム建築で、これは昭和時代に入った頃から流行した。装飾を排し、直線と曲線によって象られたシンプルなデザインとなっているのが特色。縦横にのびる直線は均衡が重視されており、等間隔であることが多い。素材としては



日干し煉瓦を用いた簡素なスタイル。福建式家屋とも言うべき存在だが、残存する数は少ない。観光客向けに開放されている「臻味茶苑」。10時から20時まで参観可能。



旧永楽町通り（現迪化街）は拡張工事が行なわれなかったため、結果として、こういった建築群が残ることになった。

タイルを用いることが多く、これもまた、すっきりとした印象を与えている。

大稻埕の衰退と現在の動き

大稻埕は淡水河の水運とともに発展し、栄華を誇ったが、戦後は衰退を免れなかった。その理由はいくつか考えられるが、特に大きかったのは道路幅が狭いことで、実際に訪れてみると、迪化街などは道幅が8メートルに満たない。現在は一方通行の形にしているが、店舗の前で車を停めることすらできない状態である。

衰退が顕著になったのは1970年頃からとされている。その後、徐々に勢いを失い、1990年頃には空き家が増え、廃墟と化した物件が数多く見られた。周知のように、戦後、台北の市街地は北と東に向かって拡張していった。すでに過密気味だった大稻埕に発展の余地はなく、徐々に時代から取り残されていった。

また、戦後、台湾の統治者となった中華民国国民党政府も、住民の郷土意識が強く、その隙間に入り込む余地のない大稻埕を積極的に開発しようとは考えなかった。そのため、おのずと動きは鈍くなった。

1977年には道幅が7・8メートルしかない迪化街を道幅20メートルに拡張する案が台北市で出されたが、実行に移されないままに放置される状態が続き、1983年にも再開発の計画が出された。その後、歴史景観の保存運動が始まり、これが実を結ぶことになる。

老朽化を免れず、取り壊されたりしたものもあったが、中には現役の商店として使用されているところもあり、日本人をはじめとする観光客も注目するエリアとなっていた。こういったものに加え、いくつかの物件は所有者の手によってしっかりと守られるところも見られた。そして、1990年代に見られた民主化の進行によって、郷土史探究ブームが起こり、庶民の関心が高まった。



栄華を誇った迪化街界隈も1970年頃からは勢いを失い、廃墟が目立つようになっていた。現在は各地で修復工事が実施されている。歴史建築の保存というだけでなく、迪化街界隈を活性化させるという試みでもある。

これを受け、迪化街一帯は2000年に台北市から景観保護区域の指定を受けることとなった。これは現状の建物を保存するだけでなく、積極的に保全と改修を進めていくというもの。経費面での手厚い補助はもちろん、修復後は公共空間として積極的に再利用していくことが明記されている。

現在、こういったリノベーション物件は大稻埕地区の活気を呼び起こし、活性化させるための起爆剤として期待されている。グッズショップやカフェ、茶芸館などとして利用されるところも多く、外国人旅行者に好評を博している。

大稻埕のリノベーション物件を訪ねる —民藝埕・南街得意

実際にリノベーションされ生まれ変わった建築の事例を見てみよう。まずは「民藝埕（迪化街1段67号）」で、ここは雑貨店、茶芸館、喫茶店、ギャラリースペースで構成されている。

この建物は1913（大正2）年に茶業で財を築いた一族によって建てられたという。一階部分は漢方薬店に貸し出され、往時は多くの顧客をもっていたという。その後、迪化街の衰退とともに勢いを失っていった。さらに、2003年には火災にも遭ってしまい、無残な姿を晒すこととなった。

その後、修復の上、迪化街の歴史を伝える存在

として運営されることが決まる。オープン
は2012年。運営するのは周奕成氏が率いる「世代文化創業」というグループ。現在、迪化街に面した1階部分が食器や茶器、雑貨を扱ったショップ「民藝埕」で、中庭を挟んで奥はワインバー&カフェとなっている。そして、2階は各種台湾茶が楽しめる茶芸館「南街得意」が入っている。

中でも、2階にある「南街得意」は優雅な雰囲気
の喫茶スペースで人気がある。窓からは向かいに並ぶ商館建築群を眺めることができ、ゆっくりと台湾茶を楽しむことができる。時が経つのを忘れてしまいそうな空間だ。

この喫茶スペースに隣接した2階部は多目的スペースとなっており、ギャラリー空間として使用されている。高い天井が印象的で、展示会や講演会などが不定期で開かれているという。

「南街得意」の蕭詩璇店長によると、「世代文化創業」のメンバーは40代以下の若い世代で構成されているという。郷土を愛する心によって結ばれた結束力は強く、それぞれがアイデアを出し合い、積極的に意見交換をしているという。

周知のように、昨今の台湾は経済的停滞はもちろ
んのこと、年々大きくなっていく貧富の差、物価の高騰に追いつかない労働者の賃金、そして、世界でも指折りの速さで進んでいる少子高齢化など、さまざまな社会問題が重くのしかかっている。



厳選された雑貨を扱う「民藝埕」。ゆったりとした空間となっている。



落ち着いた雰囲気でもとめられた「南街得意」。ぜひ立ち寄ってみたい空間だ。窓越しに向かいの洋館が眺められる。味わえる台湾茶の種類は豊富。

そんな中、才能があっても、発表の場をもたない若手クリエイターは少なくない。そういった人々にチャンスを与えるという意味でも、こういったショップや公共空間の運営は意義深いものと言えよう。現在進行形で紡がれていく大稻埕の歴史と文化。そういったものがこの空間には凝縮されているように思えてならない。

若い世代によって象られた文化再生の空間—小藝埕

屈臣氏大薬房は永楽市場の向かいにある建物で、迪化街の中心部に位置する。

ここは香港からやってきた漢方薬局で、「屈臣氏」はWatsonsの漢字訳。現在、台湾にも同名の香港資本薬局チェーンがあるが、これとは無関係である。

1931（昭和6）年3月に台湾総督府交通局から発行された案内書には、この薬局が出した広告が見える。それによると、ここは同薬坊の本局で、住所は台北市永楽町2丁目となっている。薬局主は李俊啓、薬剤師は李義人と記されている。興味深いのは、台湾中部の員林に支局があることだ。こちらの支局主は李俊當という人物で、一族経営であることが推測される。

残念ながら、屈臣氏大薬房の建物は1996年2月に火災で焼失してしまった。その後は長らく無

惨な姿で放置され、骨格だけが残るという状態になっていた。しかも、1999年9月21日の台湾中部大震災でさらなる被害を受け、倒壊寸前の様子だった。

一帯を代表する建物の一つだっただけに、その姿は痛々しかった。住民の請願もあり、台北市が建物の修復を決め、修復工事が行なわれた。往時の姿を取り戻した後、この建物をいかに使用していくかが議論され、正面は商店として、そして、端部は公共建築として扱われることとなった。

建物は華南地方の伝統様式に欧風のデザインが混じった折衷様式である。正面上部には中華風の文様が入っており、この建物のシンボルとなっていた。修復工事が施された後も、このシンボルだけは変わることなく家並みを見おろしている。

現在、この建物には委託経営の形で書店やカフェ、デザイナーズショップ、多目的スペースなどが入っている。全体としては「小藝埕 (Art Yard)」と名付けられている。「民藝埕」と同様、「世代文化創業」が運営者となっている。

一階には「1920s 書店」という書店があり、台湾の郷土文化をテーマにした書籍が充実している。また、隣りにある「印花楽」では個性的なオリジナル雑貨や布製品が購入できる。

2階には「爐鍋珈琲」というカフェがあり、3



「1920s 書店」は台湾の歴史や文化について紹介された書籍が揃う。書店名の由来は迪化街の最盛期が1920年代だったことにちなむ。民芸復興運動も盛んだった。



「思劇場」は多目的スペース。大きな本棚が印象的な空間で、オーナーの心意気を感じられる。

階には「思劇場」という多目的スペースがある。ここでは講演や勉強会、読書会、ドキュメンタリー映画の上映会などが開かれている。

老家屋に新しい息吹を吹き込み、未来へ向けて文化を発信していきたいと語る周奕成氏。1階にある「1920s 書店」は台湾の歴史や民俗、文化、伝統建築などをテーマとした書籍を専門に集めているほか、レトロなポストカード、カレンダー、ノートなど、文房具も充実している。お土産探しを楽しみたいと外国人旅行者にも好評だ。

文化を発信する複合空間—聯藝埕

「世代文化創業」が手がけるリノベーション物件の中で、最も大きな規模を誇るのが「聯藝埕 (安西街42号)」である。ここは2014年8月末にオープンしたばかりの空間だが、より個性が際だった空間として注目を集めそうな存在だ。

建物は3棟が繋がった「三連棟」と呼ばれるスタイルで、迪化街界隈でも珍しい存在である。現在、館内には5つの異なった店舗が入っている。まずはフェアトレードによる開発途上国の雑貨や工芸品などを扱ったショップの「繭菓子」、農家から仕入れたフルーツを扱う「豊味」、カフェ&ベーカリーの「鹹花生」、多国籍料理レストランの「孔雀」、

そして、書店と旅館を兼ね備えた「読人館」だ。

中でも、読人館は一般的なホテルとは一線を画しており、かつての大稲埕の暮らしを体験してもらうことを主軸に置いている。内装は1920年代を象徴する「台洋折衷（台湾式と西洋式の融合）」にこだわっており、アンティーク家具などが置かれている。

部屋数はあえて少なくしており、1LDKスタイルでロフト付きの部屋が6室。通常の部屋は3室のみとなっている。なお、大稲埕の歴史をより深く知ってもらうため、宿泊客を対象とした大稲埕ツアーも計画しているという。



往年の富豪邸宅を再現したというこだわりの空間。読人館は富豪の暮らしぶりを体験できる宿泊施設。



歴史建築を用いた文化空間として注目を集める「聯藝埕」。迪化街の新しい観光スポットとして注目されている。

仁安医院（台北社区发展中心）

ここは戦前に設けられた病院建築である。延平北路と涼州街の交差点にあり、存在感を示しているが、度重なる地震によって、傷みは激しかったという。何度か建て替えの計画が出され、高層ビルにする話もあったというが、幸い、有識者が奔走したことで保存が決まり、修復が施された。

仁安医院は1924（大正13）年に開かれている。この病院を開いた柯謙諒氏は名医として知られ、この付近では知らない者はいなかったと言われる。診療項目として、内科、小児科のほか、外科、骨科、腹腔外科、胸部外科、泌尿科、そして、男性・女性避妊手術なども挙げられている。

建物はバロック風の装飾が施された看板建築で、竣工は1927（昭和2）年。2階建てで、建坪は大きくないものの、内部は天井が高く、空間的な余裕が感じられる。かつては1階が診療スペースで、2階は住居スペースだった。

終戦まで、ここは太平町5丁目と呼ばれる地区にあった。造営時の興味深いエピソードを紹介しておきたい。この建物は竣工を間近に控えた台湾総督府庁舎の余剰資材が購入され、用いられたという。たとえば、使用された煉瓦には官印である



雑然とした家並みの中でひときわ風格を示す建築物。1階には医療器具などの展示も行なわれている。

菱形と波形の模様が刻み込まれ、セメントは浅野セメント会社のものが樽入りで届けられた。さらに、梁には鉄道用のレールが用いられたと言われている。

建物は交差点に位置し、分かりやすい場所にあるが、ここ数年は長らく遺棄され、痛々しい姿となっていた。私がここを最初に訪れた際も、ひどく暗鬱な空気に包まれているようで、見ていてつらくなったのを思い出す。

現在はコミュニティセンターとして再整備されている。館内の参観も可能となっており、かつての様子が再現されている。現在も1階には往年の医療器具などが展示され、手術台や薬品棚なども残されている。

2階は公共スペースとなっており、不定期ながら、集会や会議などが行なわれているという。また、柯家は代々、犬好きだったと言われ、応接間には飼われていた犬たちの愛くるしい姿が写真で紹介されている。

町並みは時の流れとともに変わっていくが、この建物が放つ風格とたたずまいは、変わることなく、人々に親しまれているように思える。

庶民信仰の場・慈聖宮を訪ねる

大稻埕は清国統治時代、日本統治時代、そして戦後もまた、常に台湾住民が自身の手で築く文化の発信基地であった。台湾は「有史に登場して以

来、常に外来政権の下に置かれてきた」と記されることが多いが、大稻埕についてはその様相は異なる。時の為政者は自己に都合のいい政策を打ち、台湾を治めてきたが、ここだけはどの時代も自らの文化を堅持し、進化を遂げてきた。

ここ慈聖宮はそういった人々たちが手を合わせ、加護を祈った空間である。涼州街と保安街の交差点から少し奥まった場所にあり、大きく繁茂したガジュマルが参拝客を迎えている。迪化街にある霞海城隍廟、南京西路にある法主公廟とともに、大稻埕三大廟に挙げられる存在だ。

ここは主神に媽祖を迎えている。媽祖は航海の女神とされ、奉祀する廟は台湾だけで500あまり、分霊先を含めると3000を数えると言われる。言うまでもなく、台湾庶民信仰の最大勢力である。ここもまた、通称「媽祖宮」と呼ばれており、参拝客が絶えない。

この廟は広い前庭を擁している。この空間は廟で開かれる祭事の会場となるが、普段はここにテーブルと椅子が出され、庶民の社交場として機能している。数十軒の料理屋と屋台が並んでおり、人々は思い思いに料理を注文し、青空の下で舌鼓を打つ。そして、ひたすら雑談を交わす。そういった素朴な光景が日々、繰り返されている。

現在の廟宇は1916（大正5）年に竣工したものであるという。もともとは現在よりも淡水河に近



廟の前には広場があり、そこが社交場となっている。素朴な料理が味わえるグルメスポットでもある。

い場所にあったが、明治 43 年の都市計画によって廟は遷移を強いられた。大稲埕は台湾住民が多かったことから米軍機による空襲が少なかった。そのため、戦災からも免れた。戦後も修復と保全が繰り返されたため、保存状態は良好だ。

内部に入ってみると、喧噪とは無縁の静寂の世界が広がっている。散策の途中に立ち寄ってみてはいかがだろうか。

カフェとして再生された病院建築—保安捌肆 Boan 84

順天外科医院は保安街と延平北路の交差点に近い場所にある。1920 年代の雰囲気を残す歴史建築で、整然とした外観ではあるものの、表面に据え付けられた擬似列柱がアクセントとなっている。また、窓枠なども凝っており、細部にまで装飾が施されている。これらはこの時代に特有のデザインである。

現在、ここはカフェと多目的スペースとなっているが、長らく外科医院として使用されていた建物である。医院の創始者は謝唐山という人物だった。台東出身のプユマ族で、台北で台湾総督府が設けた土人醫師養成所（この場合の土人は台湾人を示している）に進学し、1904（明治 37）年に台湾総督府医学校を卒業している。原住民族で最初に医師の資格をもった人物だった。その後、林本源博愛医院の医師を経て、順天外科医院を開業。後には医師公会（組合）の理事長にもなっている。

建物は 1921（大正 10）年に登記がなされている。当時の住所表記は台北市太平町 86 番地。この住所をたどっていくと、昭和 10 年の時点では 1 階は古川栄次郎という人物が飲食店を営んでいたことがわかる。その後、昭和 15 年に梁術正という人物が建物を借り受け、松田商店という雑貨店を開いた。

終戦後は倉庫として使用されていたと推測されるが、1948 年 2 月 18 日に謝氏一族がこの建物を

購入。翌年から外科医院として使用されるようになる。もともとは木造家屋だったというが、後にコンクリートで補強工事を受け、現在の姿となった。医院として使用されたのは 1 階のみで、2 階と 3 階は住居空間となっていたという。

正面には「順天外科醫院」という文字が誇らしげに残っている。現在は保安街と呼ばれているこの路地は、かつて診療所や薬局がいくつか並んでいたという。日本統治時代は台北でも指折りの人口密度を誇り、活況を呈していたが、その後は没落を免れず、現在にいたる。

ここはそんな中、取り壊されることもなく、もとの姿を保ってきた。

現在は歴史建築の再生事例として注目を集めている。2009 年 4 月 30 日には台北市から古蹟とし



「保安捌肆 Boan 84」。大胆な吹き抜け構造となっている。



一階にはカフェとなっており、こだわりのコーヒーを楽しむことができる。個展なども随時開かれている。

ての指定を受け、保存が決まった。医院として使用されなくなった後は傷みが激しく、痛々しい姿となっていたが、7年の歳月をかけて大がかりな保全と改修が行なわれた。そして、2013年3月に「再生空間」として新しい姿に生まれ変わった。

まず、1階はカフェとなっている。入口の奥は大胆な吹き抜け構造となっており、高い天井が広がり演出している。この店は「保安捌肆 Boan 84」と名付けられているが、これは「保安街84号」という住所表記をそのまま用いたものである。

2階は書斎といった雰囲気、アンティーク家具などが置かれている。そして、3階は「観止堂」という名の多目的スペースになっている。やや急な階段をあがっていくと、舞台がある。不定期開催ではあるが、文化イベントなどが行なわれているという。

台湾の食材を用いたフレンチレストラン

これまでも述べてきたように、迪化街界限は老家屋のリノベーションが盛んに行なわれている。最初に手がけられたのは永楽市場周辺で、そこから北に向かう形で修復物件が増えている。その最北端に当たるのが民権東路との交差点までの区間で、ここまで来ると、観光客の姿はまず見かけない。路地にも観光色は感じられなくなり、ごく普通の路地裏を散策しているような気分になる。

しかし、このあたりも老家屋の修復工事が進んでいる。中でも目をひくのは「迪化街新天地」という名の高層マンションで、建物自体は見上げるように大きい、その手前に老家屋が数軒連なるような形で整備されている。

これらは基本的に台北市政府が主導するかたちで整備されたもので、厳密には歴史建築と呼べるものではない。しかし、往年の雰囲気再現しようとする気概は強く感じられる。迪化街に面した部分は「亭仔脚」と呼ばれる台湾式アーケードと



歴史的建造物を窓越しに眺めながら味わう台湾風フレンチ。こういったスタイルの店も人気を博している。



台湾式アーケードとも称される「亭仔脚（ていしきゃく）」。
撮影スポットとして注目されている。

っており、赤煉瓦独特の色合いが格調高さを感じさせている。撮影スポットとして人気がでそう
だ。

この家屋群はいずれも二階建てで、階上部分にはかつて使用されていた家具や茶器、茶缶などが展示されている。一階部分はまだ用途がはっきりしていないが、商店、もしくは展示・イベントスペースとして使用されるようである。

最後に老建築とは関係がないものの、一軒のレストランを紹介したい。「知貳茶館（迪化街1段356号之2）」というこの店は、オープン以来、美食家たちの注目を集めている。ここでは基本的にフランス料理を供しているが、あくまでも台湾の食材を用いることにこだわっているという。台湾ならではの食材で味わいを表現し、同時に、台湾の食材がもつ本来の美味しさをフレンチの手法を借りながら再現していくことを理念にしているという。店内は明るく、料理も洗練された味わいなので、ぜひとも味わってみたい。

片倉佳史（かたくら よしふみ）

1969年生まれ。早稲田大学教育学部卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。これまでに手がけた旅行ガイドブックはのべ35冊を数える。そのほか、地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けているほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。著書に『台湾に生きている日本』（祥伝社）、『旅の指し会話帳・台湾』（情報センター出版局）、『観光コースでない台湾』（高文研）など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』（宝島社）を手がける。最新刊は台北生活情報誌『悠遊台湾』（片倉真理との共著）。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>